

子供に劇を與へる心持について

高 島 巖

五八

一、兒童劇の要求

兒童劇は、子供たちが生れながらにして持つてゐる美しい情操をばぐくみ育て、ゆく上になくはならないものである、こいふことは、誰しもの稱へるまゝころであり、また、實際に、兒童劇が、情操教育の手段として活用せられて來たことも、今更こゝあたらしく述べるまでもなく、明かな事實である。

けれども、多くの人々が、この兒童劇による教育が、人間としての全的教育の重大な使命をもつものであることに ついて、あまり關心を持たないのは、さういふわけであらうか。

それこそ、兒童劇を、いまだに、おきぎ芝居として、たゞそれ、非教育的な、非現實的な、荒唐無稽なもので

あつても、兎がさびだしたり、龜がはしつたり、お姫様が 出て來たり、仙人が現はれたりすれば、それで立派な兒童 劇であるやうに考へて居られる向が、かなり多いのである。 私は、兒童劇こいふテクニクを、特に主張するものではない。子供芝居でも、おきぎ劇でも、名稱はさうでもよいと思ふが、そのころは、あくまでも、子供たちに對する、人間としての全的教育をその使命とするものでありたいと思ふのである。

數年前、當局は、學校劇に對して、相當峻烈な制限を加へられたことがある。

勿論その時の當局の心持のなかには、學校劇を獎勵することによつて生ずる色々な弊害を懼れて、これを制限するやうになつた、相當デリケートな氣持のあつたことは、云ふまでもない。

けれども、若し當局が、この點、つまり子供たちに對する人間としての全的教育をその使命とする兒童劇若くは學校劇に對して、理解をもつこゝがあつたならば、彼等は、おそらく、あの、一面あまりに厳し過ぎると思はれるやうな制限はしなかつたに違ひないと思はれる。

學生が白粉をつけるこゝがいけないのなら、白粉をつけるこゝだけを禁ずればよいのである。

人、あるひは云ふかも知れぬ。白粉の問題ではない、衣裳の問題ではない、その悪いところは、要らぬ虚榮心を養ふからである、こゝ。

しかしながら、若し、それだけが理由なら、その點の改革を何故しなかつたのか。

子供は劇を愛するのである。子供は創造したいのである。子供は發表したいのである。

われ／＼は、この極めて自然な人間の慾求を、たゞ、少數の子供たちによつて摘發される虚榮心の故に、放り出してしまつていゝのであるか。

また、所謂虚榮心にしても、今一歩進んで考へて見るな

らば、それは、必ずしも、悪いものではないのである。

すぐれた人間になりたい、いゝ人間になりたい、はづかしくない人間になりたい、さういふ所謂、彼等の人間建設への尊い努力の現はれである場合が、非常に多いのである。

創造したい氣持、發表したい氣持、更に、すぐれた人間になりたい、いゝ人間になりたい、はづかしくない人間になりたい、それらの氣持を、誰が、悪いものとするこゝが出来るか。

「あつし、随分よく出来るでせう」

ミ、七つになる女の子が云つたミする。その心のなかには、さうかしてよく出来るいゝ人間になりたいいゝ氣持があるのである。

「あつし、随分綺麗でせう」

ミ、五つになる女の子が云つたミする。この子の心は、美を憧れてゐるのである。

美を憧がれる心、それは、ミりも直さず、藝術を愛する心である。

これを、たゞ、要らない虚榮心ミのみ、叱りつけてしま

ふこじが出来るか。

「僕、こんなこじを考へついたらよ。」

こ、八つになる男の子が、自慢さうに云つた。こは、彼がやがて成人した時、世の多くの人を利益する、輝かしい發明の下準備であつたかも知れない。

「僕、こんなものを作つたよ。」

こ、同じ八つになる子供が、得意げに云つて、人々の注意を求めた。これは、彼がやがて世の中へ出て、あるものを創作せんとする、その努力のある階段でない。誰が斷言するこじが出来るか。

私共は、この極めて人間的な慾求を、劇によつてコントロールするこじが出来る。調和させるこじが出来るのである。しかも、劇は、彼等の人間的慾望を充すこじの他に、彼等をして、あらゆる方面から全人的に教育するのであるから、われ／＼は、出来るだけ、これについて研究し、最も有効適切に、これを子供たちに與へねばならぬのである。

一、兒童劇指導者の心がまへ

さて、以上で、大體われ／＼が、子供に兒童劇を與へる必要がわかつた。次に來る問題は、しからば、われ／＼は、如何なる心がまへをもつて、劇を子供に與へるかといふこじである。

一體今日わが國に於ける兒童劇の與へ方は、非常に大きな誤謬に陥つてゐる。それは、一言で云へば、創造し發表するこじのよろこびよりも、見せるこじのよろこびに重きを置いてゐる。

これは、主として中世期以後の演劇が、あまりにもはつきり、舞臺と客席との區別を設けたこじに源を發してゐると思はれる。

舞臺は舞臺、客席は客席、その間に何等の共通するものがない。役者は、たゞ見せるために動き、觀客は、たゞ娛樂せんがために見物してゐる。

この長い間の傳統が、兒童劇にも影響を與へてゐるのだと思ふ。

「随分うまくやるなあ」

「つまんないの！」

子供たちは、演じてゐる友達に對して、少しの關心もなく、共鳴心もない。たゞ、見せるから見てゐるんださいふ氣持である。

しかしながら、これに反して、少くも原始時代に於ける演劇に於いては、劇は、一つの感謝の現はれであり、信仰の表示であり、よろこびの表現であつた。演ずるものも、観るものも、一つの創造することに對するよろこびに溶け合つてゐたものである。かの外國に於ける聖劇の如き、わが國に於ける豊年祝、盆おさりの如き、一國を擧げ、一村を擧げてその日を待ち、その夜を待つ、この協同して創るよろこびを、今日のわが國の兒童劇は、忘れてゐるのである。

先生さいはれる人は、ただ御自身の成功のために、あるひはまた、御自身の法悦のために、子供たちを犠牲にして居られる。

「さあ、もうあと二日ですよ、しつかりやらないよ、みんなに笑はれますよ」

「なんです、そのしづさは、もう十ペンも直させただや

ありませんか。だめですよ。他の組の人たちにばかにされ
ますよ」

先生の頭には、演技する、その子供のこころなきは、みじ
んもない。ただあるのは客席である。他の組の子供たちで
ある。もつと強く云ふこころが赦されるならば、御自身の成
功であり、御自身の法悦である。

さて、かうしていよく、二日経つて公演の日が來たこ
する。

かんじんの演技する子供たちは、連日の練習のために、
疲れ果てゝゐる。足も手も動かない。頭は、鉛のやうに重
く、セリフは、すつかりわかつてゐるやうな、また、なん
にもわからないやうな、不思議なこころ、心に陥つてゐる。

たゞ、有頂天にはしやいで、ゐるのは、指導者である、
演出者である、先生だけである。

こんな風で、満足な演劇が出来る道理はない。少しも感
情の入らない、ふねけた劇が、舞臺の上で、たゞ進んでゆ
く。

これが、ほんミウの兒童劇演出の方法であらうか。

これで、子供たちは、全人的に教育されるであらうか。
正しい児童劇は、子供自身によつて創られねばならぬ。
演出も。

演技も。

装置も。

照明も。

子供たち自身の心のおもむくまゝ、その憶ひの及ぶ限り
がなされゝば、それでよいのである。

更に、他の方面より考へるならば、舞臺がなくとも、演
出者がなくとも、若しそこに、何かを創造し、發表したい
希ひがあるなら、そこに劇があるさへ云へるのである。

例へば、こゝに、五つになる女の子ミ、七つになる女の
子ミ、それに、同じ七つになる男の子がゐるとする。

彼等は今、お座敷の八疊間で、まゝごをやつてゐる。

室の中には、お父さんの書物でかこまれた、臺所ミ客間ミ
居間ミの家が出來てゐる。七つになる男の子がお父さんに
なつた。七つの女の子がお母さんになつた。五つの女の子
は、ねいやである。

この間おばさんからお土産にいたゞいたまゝご、道具の
おぜんが運ばれる。茶碗が、はしが。

そして、その間にかわされる子供たちの會話を見よ。

これが劇でなくてなんであるか。

また、こゝに六つになる男の子ミ、八つになる女の子が
あるとする。

彼等は弟姉である。

「ねえさん、ねえさん、ねえさん、こゝに面白い繪が出て
ゐるよ」

「さうれ」

「僕、この男の子になるから、ねえさん、女の子になつて
ね」

「えゝ、いゝわ」

「男の子ミ女の子は弟姉だよ」

「えゝ」

「そして、男の子はあんまり泣かないけき、女の子は、よ
く泣くんだよ」

「あら」

「さあ、ねえさん、一ベン泣いて見てよ」

そこで、八つになる女の子が、静かな泣き聲を出した。男の子は、女の子の肩に手を置いて、これを慰めた。すばらしい劇ではないか。

子供たちの生活を凝視せよ。われ／＼は、あらゆるまじろに劇を發見する。

そこには、緞帳の下つた舞臺はない。

そこには、指導者ミ云はれる演出者はない。たゞあるのは、創造せんミするこゝろだけである。

要するに、創造せんミするこゝろがあり、それに對するあくなき感激があり、更に、動作ミこゝろがあれば、劇は成立するのである。

前述の、八疊間での、あのすばらしい演劇、しかも無理解な大人は、

「なんです、ね、こんなによこしてしまつて。お父さんに叱られますよ」

ミ云つて、あまりにも無慘に、このすばらしい創造を打ちこわしてしまふのである。

しかしながら、こゝで注意したいのは、子供たちは、お父さんに叱られるのがこわさに、一ベンはその創造を中止するが、ものゝ十分もたゞないうちに、再び彼等は、前よりも更にすばらしい創作を始めるのである。

この限らない創造の力、創作の力を愛したい。伸したいのである。

三、兒童劇指導の實際

以上で、われ／＼が、劇を子供に與へる心がまへが出来たミして、次に來る問題は、實際問題ミして、子供たちに、如何に劇を與へるかの問題である。

(1) 脚本の選擇

こゝで、第一に起つて來る問題は、如何なる脚本を選擇すべきか、つまり脚本の選擇である。

この問題の答へミして、私は、前述の、兒童劇を人間ミしての全的教育を使命ミするものミ理解する立場から、次の數項に分けて考へて見たいと思ふ。

一、子供の生活を取り入れたもの……子供は、自分たちの生活を、何等かのかたちによつて、再現されるのを見、また聞くことに、非常なよろこびを感じるものである。

「かあさん、おつぱい……」

さいふ言葉が、脚本の中に出て来たとする。子供たちは、たゞもうそれだけでうれしいのである。彼等は、温かい母親の膝を思ひ出し、その聯想として、忽ち母親のやさしい愛しみを憶ひ、それに對する美しい感謝の氣持をもつて、そのこゝばを語り、また演技するのである。

また、その脚本の中にまゝ、この時の、あのなごやかな空氣、また、その時に用ひられる子供たち自身のこゝばが用ひられてゐるとする。子供たちのこゝろは、直ぐさま、まゝ、遊びを始めるのである。しかも、まゝ、遊びが、子供たちの家庭乃至は社會生活の訓練として、よいものであるとするならば、この種の脚本を選ぶことは、彼等の人間としての生活に、もう一度、その訓練を繰りかへすことになる。

私が、子供の生活を取り入れたものを選びたい氣持はこ

こにある。

更に、ここで、つけ加へて注意して置きたいのは、子供に與へられる脚本に於いて用ひられてゐるこゝばが、その程度までに、子供たちが日常用ひてゐるこゝばに近いかといふことである。勿論、非常にわるいこゝばを、子供たちが常に用ひてゐるさいふ理由で、わざ／＼もつて來る必要はないが、出来るだけ、子供たちの語るそのこゝばが使はれてゐるものを選びたい。それは、一番近く子供たちの生活に近づき得る手段であるからである。しかもそのこゝばは、そのまゝ、彼等の生活を再現するからである。

二、藝術的なもの……これは子供たちに、美に對する關心を與へるため、さうしても考慮せられねばならぬ點である。児童劇は、常に一つの立派な藝術でなければならぬ。

ある人は、児童劇を、説教の代りに用ひる。

悪いことをするを、かういふ悪い酬ひがあるから、決して悪いことをしてはいけない、とか、ある子供が正直にしたために、こんなに幸福になつた、諸君もみんなこゝが

つても、虚言を云つてはならない、正直にしなければならぬ、さかひ風な種類の材料をあつかつたものであつて、これは説教であつて、藝術ではないのである。

私は、かういふ脚本があつてはならないとは云はない、むしろたくさんあつてほしいと思ふのであるが、これが藝術脚本であるかないかといふことになる、問題である。

またある人は、児童劇を宣傳の手段に用ひる。

最近プロレタリア演劇といふものがある。これの善悪は別として、これを、子供に與へる脚本の中にまで持ち來つてゐるものがある。大人に對する運動だけでは足りない、子供の時からこれを教育せよ、といふわけで、子供のプロレタリア思想を植へつけるのである。

これは、單にプロバガンダ、宣傳に過ぎないのであつて、藝術脚本ではないのである。

要するに、子供たちが生れつき持つてゐる美しき情操、正しき感情、夢の如き空想が織り込まれてゐる、所謂藝術的香りの高いものが望ましいのである。

三、善なるもの、正なるもの、ことに愛情を高調したも

の……これは、子供たちの心に働きかける最も大きな力である。善に對するあこがれ、正しきに對する勇敢、こゝろに愛情に對する思慕の、人間生活にまつて大切なこゝろは、今更云ふまでもない。

ある時、私は、ある教師會に臨んだことがある。その時の研究題目は、舊約聖書に出てゐるカインが弟のアベルを殺害する人殺の場面であつた。集つた五十人ばかりの人は、この材料を子供たちに傳へるこゝろについて研究した。私は、實はこの學課を子供たちに與へるこゝろはよくないを考へて、みんなに諮つた。

「この學課は、外のものにかへたいと思ふ。理由は、この殘虐なこゝろがら子供たちの前に展開するこゝろは、折角美しい子供たちの心に、悪い、暗いいけない印象をのこすこゝろになるから。……」

その時、一人の年をまつた教師が立つて反對した。

「あなたの云はれるこゝろにも一理はある。が、子供たちは、毎日のやうに人殺のはなしは聞いて知つてゐる。一ペン位聞かせても、そんなに強くひびくものではない」

私は、それに對して次のやうに答へた。

「私の考へは違ふ。多く見聞きしてゐればる程、教育者として、なるべく少く見聞きさせるやうに努力せねばならぬのではないか」

私は、子供には、なるべく、わるいこことがらは見聞きさせぬやうにしたいと考へてゐる。たゞそれがよいことの勝利に結ばれるこことがらであつても。

美しい子供たちの心は、それによつて汚されるのである。知らなかつた子供は、それによつて知るのである。わるいこことがらを。

社會の各方面を知らせる必要がある。ミ多くの人はいふ。しかし、われ／＼が知らせなくとも、知らせる人は、残念にも、たくさんあるのである。その度數を少しでも少なくするこことが、われ／＼の努めではないか。

この意味から、私は、從來盛んに用ひられて來た邪惡に配するに正義、ミ云つた風な、また善を強調するための惡い風なこことがらを内容とした脚本に對しては、好意を持つこことは出來ない。これミは反對に、よきものミよきも

のミのあひだにかもされる美しき情操の輝き、感激、すばらしい空想ミ云つたやうなもので構成されたものがよいのではないかミ考へる。

愛する心ミ愛する心ミがもつれあつて、より高い愛の感激を覺えさせるやうな、正しきミ正しきミが重なりあつて、より強い正義の高潔を想はせるやうな、さういふころにテーマを置くものをこりたいと思ふ。そこには、美しき、正しきミ、愛ミだけがあるやうな脚本を愛したく思ふのである。

四、社會的關心を呼びおこすもの……これは、子供たちが將來社會に立て行くために、最も必要缺くべからざるものである。

要するに、社會公共的精神を盛つたものである。

子供たちが自ら社會人ミしての意識を持つやうになるこミは、相當困難な問題であるが、すぐれた脚本によつて知らず識らずのうちその精神が植えつけられるこミは、やがて彼等が成人した時、彼等の社會的活動を少なからず援けるこミは、決して想像に難くない。

五、勤勞、勤勉を獎勵するもの……たゞ、この問題に前の問題（社會的關心を呼びおこすもの）に於いて、最も注意を要するのは、それが説教に陥らないことである。説教に墮する時、それは藝術としての價値に支障を來すことになる。

六、自然をとりあつたもの……自然に對する美しい氣持の養成のために、これは是非必要である。自然に對するしたしみは、子供たちが生れながらにして持つてゐる詩心を培ふ。しかも、それは彼等の人生に、思はぬ大きな影響を與へるのである。

七、宗教的なもの……宗教を強ひたものは絶対にさげたい。彼等がやがて成人して求むる時、正しきものをつかみ得るその素地を作るべきものを選びたい。わが國に於ける學校教育は、不幸にも、このこゝに觸れないのである。われわれは、すぐれた脚本によつてこれを子供たちに與へたい。

八、風景、風俗、地理、歴史をあつたもの及び
九、科學的なもの……は、子供たちの智的方面を援け

るものであつて、望ましい。但し、この場合充分注意せられねばならぬのは、それが正しく取りあつかはれてゐるかどうかをしらべることである。

私の友人で尋常二年生の子供をもつ人がゐる。友人はこの息子に、二年生の童話さいふ五十錢本を買つて與へた。ところがその中に、美しい聲を出して鳴くお母さん鳥がうたさいふのである。鳥は雌よりも雄の方が美しく鳴くのである。

風景、風俗、地理、歴史その他のこゝがらが正しくあつかはれてゐるものを選ぶこゝが最も大切である。

(2) 役割の決定

さて、演ぜらるべき脚本が、前のやうな氣持を中心にして選ばれたとして、次に起る仕事は、役割の決定である。

この問題は子供を指導するものによつて、相當重要な問題である。われわれは劇人としての子供を持たない。グループ全體が、われわれの對象である。故に、若しこの人選が適當に行はれなかつたならば、折角子供たちを全人的に

教育しやうとする立場から、劇を子供たちに與へるのでありながら、それによる効果なきは問題にならない程、大きな損害を蒙るこゝがある。

子供たちは、前にも云つたやうに、ごの子供も、創作したがつて居り、發表したがつてゐる。例へば、グループの子供が二十人あるとする。しかし選ばれた劇に要する人物は十人である。さうしたらよいか。更に、この人数の問題は、さうにかかたがついたとして、役割をさう決めるか。

役不足を感じる子供はないか。また、全體の効果をあげるためには、ある子供には、その役では荷が勝ち過ぎはしないか。しかも、その役をかの子供は望んでゐる。これらの問題は相當大きな問題である。

われわれは、このこゝのために、あらかじめ、準備せねばならぬ。

私の方法はこれである。

先づ、何よりも先に、選ばれたる脚本を、總ての子供の前で、朗讀するなり、また、はなして聞かせて、然る後に、子供たちに、役を買はせるのである。

勿論、この場合、二三の重なり合ひは豫想しなければならぬ。しかし、子供は、大抵自分の力を知つてゐる。また、自分の得意を知つてゐる。と同時に、人の力も人の得意も知つてゐるものである。あの子はきつごこの役を買ふから自分はこれ、さういふ風にゆくものである。若し、さうしてもうまくゆかない場合は、指導者から、説明をして指名する。

これが、一番いゝやうである。

たゞ、この場合、なるべく、みんなに役のつくやうなものを選ぶこゝが出来れば、これにこしたこゝはない。

(3) 練習

次の問題は、練習である。

前のこゝろで、朗讀若くははなして聞かせる、さう云つたが、練習の最初は、やはり、朗讀して聞かせるこゝである。はなして聞かせるこゝである。

私は、いつも、脚本の朗讀の時には、その脚本の氣分を援ける意味から、レコードをかけながら朗讀する。

子供たちは、音楽を、そして読みあげられるセリフに、心を奪はれ、その氣分にしたつてしまふ。

一つ／＼のセリフなきは、何にも憶えない。それでいゝのである。これを二三回繰返へして、あこは、直ぐ、ステージに立たせて、演技をさせる。

よく、子供たちに書き割を與へて、何時何日まで暗記をして來るやうに云はれる方がある。が、これには、私は賛成しない。

第一、書き割を與へて暗記をさせなければならぬやうな長いものを、子供たちに與へるのが間違つてゐる。かういふことをするから、勉強のさまたげになるさか、餘計な頭をつかはせるさか、批難されるのである。

私は、童話を練習する人たちによく云ふことであるが、童話は決して暗記をしてはならない。なるほぎ暗記をしてゐる程でなければ話は出來ないと思はれるのも無理はないが、暗記をするこの害は、想像を全くだいなしにする他に、その場のウィット、その場の氣分に乗るこゝを出來なくする。

これと同様に、兒童劇に於いても、われ／＼は、出來るだけ暗記の方法でなく、彼等が、指導者の朗讀によつて理解した、その氣持を、その心持を、そのまゝ、子供たち自身の動きと言葉によつて、進めてゆく方法をせりたたい。

脚本には、作者のくせがある。そのくせを、子供たちが必ずしもつてゐるさには限らない。全體の氣分さへわかれば、あこは、子供たちのはたらしに委せればよいのである。

私は、最近ニールの書いた *The Problem Parent* という書物の譯本を讀んだが、その中にホーマー・レーンの、母子の話が引用しあててゐる。

「ごくちいさい赤ん坊が、ふみ自分の前に動くもの——自分の手——に氣がつく。それから、赤ん坊はこの新らしく發見した手を、さうやら自分の思ふやうに出來るこいふ事實がわかつて來るさ、赤ん坊は、それを動かすこゝが出來るのである。次に赤ん坊は、このものが何に似てゐるかを見出さうとする。だが、この時まで赤ん坊は物の性質を調べる方法として、口を用ひるより外に方法がない。其處で赤ん坊は手を直に口に持つてゆくのである。しかしそれ

は、簡單にはゆかない。赤ん坊は幾度もく同様なこころをやつて見る。そして終には疲れてしまふ。でもまた続ける。この時母親は赤ん坊のこの様子を見てゐる。そして赤ん坊がぢれつたがつてゐるのを見て、すつかり手傳つてしまふ。母親は赤ん坊の口を手を持つて行つてやる。するこゝ

赤ん坊は足で蹴つて泣く。それは母親が赤ん坊の最初の精神活動を妨げたからである。赤ん坊の本來の望は、手をお持つてゆくこゝであつた。しかし、その望は、母親のおせつかいのために、間もなく消えて、更に大きな興味——手が其處に来てゐるこゝ——がそれに代つた。不用意にも母親は、赤ん坊の創作活動を妨害してしまつたのである。不用意にも彼女は、精神の前に物質を置きかへてしまつたのである。

劇に於いても、指導者は、先生は、しばしば、この子供の創造的活動を妨害する罪を犯す。

子供は、常に創造してゐる。

大人は、それを妨害してゐるのである。

物質の前に、精神を與へよ。

セリフの前に、氣分を與へよ。

子供たちは、その氣分からセリフを創造するのである。

(4) しぐさ

次の問題は、しぐさである。

これも、やはり、子供たちに、まかすべきである。たゞ子供たちには、かうすればかうなる、こゝの推理の力がない。この點に注意して、大體の方針さへ與へればそれでよいと思ふ。たゞへば、ちいさなセスチュアは、遠くからは見えないさか、早い言葉は、遠く通らないさか、いふ注意は必要であるが、その他のこゝは、全部彼等にまかせて差支へない。むしろさうするこゝが、その劇に、兒童性を與へ、自由を與へ、子供らしい潤ひを與へるこゝになるのである。

(5) 舞臺裝置・衣裳・照明・その他

その他、舞臺裝置、衣裳、照明、こゝこゝ子供にやらせ、指導者は、そばで靜かに見護つてやるやうにしたい。

こころさな感じはよくない。

特別な準備はよくない。

凡て、子供たちの標準、子供たちの理解、子供たちの力に應じた仕組みにしたいと思ふ。

白い着物をきた方がいいと思へば、子供たちは、直ぐに、自分に最も近い、毎晩使つて寝る敷布をもつて来る。

杖が要ると思へば、子供は、直ぐに、近くにある藪の中から適当な竹を切つて来るのである。

舞臺をもう少し高くしたいと思へば、子供たちは、きこからか探して来たみかん箱を積みかさねて、それを高くする。

指導者のつこめは、この子供たちの創造に對する熱心を妨げないことである。これを伸してやることである。

前後のわきまへもなくもつて来た敷布を、もう一度つかへないやうにしてしまふのを防ぐことである、竹藪に入つて竹の切りかぶで足をきづつけないやうに護つてやることである。舞臺がこわれて、子供に怪我をさせないことである。

結論

最後に、もう一度申述べたい。

児童劇は、子供たちに對する、單なる情操教育の一手段ではない、人間としての全的教育をなす、極めて大きな仕事である。

おせつかいは禁物、ただ子供たちの創造への努力を、か
けから援けよ。

これが、私の申し上げたいことの總括である。

倉橋主幹今夏の講習

七月二十一日—二十六日	東京市	日本幼稚園協會主催
七月二十七日	”	昭和保姆養成所主催
七月三十日	”	佛教保育協會主催
八月一日—三日	仙臺市	宮城縣教育會主催
八月六日—八日	長崎市	長崎縣保育會主催
八月九日—十一日	岡山市	吉備保育會主催
八月十三日	舞鶴町	舞鶴幼稚園主催